

ブツンと切れた明るい将来?

2004年10月に、翌年GM大豆栽培計画と発表され、その後、多くの方たちからたくさんの方々の貴重なご意見をいただくことになった。しかし、遺伝子組み換え作物に対するその知識の内容たるや、ガキの使い程度の内容ばかりで落胆させられることになった。それに私は大きな勘違いをしていた。一番、GMには理解があると信じていた十勝の生産者の発言内容は、個人のバックグラウンドから来るのだろうか、所詮、北海道といえども地理的にアジア文化の一番東端であると、自分たちで証明することに違和感をぬぐいきれず、組み換えから多くの利益を出している日本の現状を無視する貧困バイオニア精神は、バイオの勝ち組米国から笑いのものと呼ばれても仕方がない。

十勝地方は北海道のみならず、日本でも一番の農業地帯といえるだろう。酪農、畜産、穀物、野菜など、適度な降雨量、低湿度の環境、晴天率、雑草が少ない肥沃な農地がもたらす営みは、道内はもとより一部は海外進出を果たしているのだが…。

だが時として神は自分の子である人間に、いじわるな試練を与えることもあるようだ。それは私に対してなのか、十勝の生産者に対してなの

かは、今もってわからない。

たしか、その当時は30名くらいの十勝の生産者と付き合いをしていて、自分はしっかりと彼らに利益を与え、彼らと農業のみならず、明るい将来について語り合ったことも、

幸せを作ることができない日本占めにしえ農業を

助長させる戯言だったのだろうか。

GM大豆栽培計画発表以降、これまで何も無かったかのようにブツンと音信不通状態になったのだ。

現在では数名のみの付き合いになったが、彼らの器の大きさを示す良い機会を与えていたことに感謝する。残った数名には仕事関係、つまり商売関係の方たちが含まれ、その後も普通に付き合いをさせていただいている。ということはブツンと切れた生産者たちは自分の農業は金にもならない行為だと、自らが証明したことにもなるのだろうか。

世界で一番古いかもしれない100年以上前に米国(英国説もあり)で開発された原種を北海道に持ち込

「十勝の農家は日本一!」

Vol.49



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに粟50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子供時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。年商約1億円。

Illustration by Kazushige Akita

み、商業栽培された男爵やメーカーのイモを日本一だ! と何も知らない消費者に騙されるのならまだしも、世界のバイオに対応するのを怠けていた生産者や流通の怠慢は、いつまで十勝農業を蝶よ花よと舞い上げ、翼を付けプロペラを全開させ、バンザイ! 攻撃できるのか疑問だ。そのような十勝の生産者は単に自惚れ野郎の集団に過ぎず、他地域の嫉妬の対象な

オレにも
言わせる!

北海道長沼発
ヒール宮井の憎まれ口通信

のだろうかと誤解を与えること自体が、やはり日本の農政は素晴らしいと実証できることの証でもある。

「アイ・アム・ソーリー」

さて、今まではフォアブレイです。これから十勝愛憎劇場は佳境に入ります。

G M騒ぎの時、ある研究者からいわれたことを思い出します。この方は当時、国立の試験場で働く方で、ご本人は米国の有名な研究機関にも勤務したことがあると聞いていた、ユーモアたっぷりの人でした。その時付き合っていた十勝・芽室町の生産者の紹介で、04年10月20日に会うことになったのですが、話を聞けば聞くほど、怪しさを醸し出すには十分な素質を私にぶつけてきました。「私たちの予算で宮井さんの農場の周りに監視装置を置いて、アラームが鳴るようにしますよ、なんでしたら監視カメラを設置して、自宅からモニター出来るようにします」私はその時「えっ！ホントですか？」と叫んでしまった。

そして「騒ぎが終了した後も、その機材を自由に使っていたらいい条件構いません」との信じられない条件を提示してきたのだ。

以前、茨城県でG M大豆畑が反対派の活動家によって踏み荒らされた

ことがあり、自分がテレビにほぼ毎日1か月、出ている間、怪しい輩がいつやって来ても対応できるよように、**お国の予算(?)で宮井さんを保護しますよ**というありがたい提案であった。それに用意周到、業者まで一緒に来ているのです。

基本的には、心からありがたい方を紹介していただいた十勝の生産者に感謝しようかなと、心が傾きかけたが、その施工費用が数百万円になると聞いて、「ちょっと待てよ」という疑念の声が自分のちっぽけな良心から聞こえてきました。だってその長い長沼のおやじに、こんなことして何のメリットがあるのでしょうか? それともG M騒ぎを予測してでもいのでしょうか。自分で稼がないヤツとは係りを持ちたくないの後日やんわりと、この研究者と業者にはお断りのメールを入れたのですが…逆ギレしたのです。

その当時、十勝のメンバー30名のほか北海道の生産者20名、バイオ関係者とフリーメールを使い、あーでもない、こーでもない、農業のよもやま話を語っていました。一般には公開していませんでしたが、突然このフリーメールに入って来られたのです。今一度、当時のメール内

容を読んで見て考えさせられることは、この研究者は神がかり的な精神論ばかり述べていて現実味が無い、まるでどこかのお寺を破門させられた坊さんの様な話をしてるということでした。本来であれば研究機関で働いているのですから、G Mの良き理解者であるべきなのに「この人ってG M反対派なの?」と強い不信感を与えてくれたのだ。その当時、

国の研究機関ではすでにG Mの研究をしていたし、現物も存在していたにもかかわらず、この研究員はG Mの正しいメリットを伝えないどころか、慎重派のシンパシーをくすぐりたいだけであり、早く公務員を辞めた方が良くと思ったほどです。その後の彼の消息に興味はないが、今は国民のためにG M反対派のスパイをやって、畑の肥やしになっていないことを祈る優しさは持っています。

などと他愛のないお遊びのなかでも、極め付きは「宮井さんG M栽培やるっていついたら、**子供たちがいじめられますよ**」と心配していただけだ生産者もいたことだ。

なぜ子供たちがイジメられることになるのだろうか、よく考えてみた。別に法律に反する行為をしたわけでも、公序良俗に反することをしたわけでもない、まして金が動いたわけでもない。安全性は国家が担保し

ている。あるとしたらイイ男(もちろん私のこと)がテレビに1か月間、毎日出ていたことで北海道の女性のがあこがれるのになって、男性たちが萎れちゃったことぐらいしか思い出せなかった。自分の良識ではイジメがあるはずがないと確信したし、今もって子供たちからそのような被害報告を受けることはない。

ある方の話では、「心配してるよ」「イジメられるよ」の深層心理は「心配する訳ないでしょ」「イジメられる」と無意識に自分を加害者とならないように弁護する言葉であるらしく、多くの場合、過去の実体験を否定できず、肯定するための手段だという。これを英語で表現する場合「**アイ・アム・ソーリー**」「**とても残念な人たち**」とでも訳しておこう。

今回は十勝のことをたっぷりイジメル様に書いて大丈夫かって? 大丈夫、ヒール宮井ごときに目くらまら立てる小者は今の十勝には残っていませんね。それにどんなことがあっても十勝は日本一のところで、「G Mが栽培できるようにって一番メリットがあるのは、やはりこの十勝ですから♡」という生産者も存在する。さすがだ、あつぱれ十勝!

あつ、それと、先ほどのフリーメールの会社はG M O、やはりG Mとは縁がありそうだ。